

C. 経験を重ねる、納得する

C-1. 独自の世界を作り出せる遊び文化「こま回し」

ひがしなえぼ幼稚園(北海道札幌市)

[4~5歳児]

事例 『こま回し』

「こま回し」の技を自分なりに試行錯誤したり技を磨いていく中で、心揺り動かされる事例やその環境について保育打ち合わせの中で繰り返し話題にしてきた。「こま回し」という遊びが、幼児にとってどのような魅力があり幼児の心を捉えて離さないのか。幼児自身が生み出した自分の世界は心と体の運動性がより活発化するのではないかと思われ、その側面からも考えてみたいと思った。

年少児だった頃

ここ数年、ホールにこまコーナーがあり、ボランティアのおじいさんからこま回しの技術を伝授してもらっている。年少児であった昨年は、年長児たちとおじいさんのやりとりを見ていた。年長児は年少児たちが見ていることなど気にも止めず、真剣にコマと向かい、5段階ほどの技術に向かってどんどん挑戦していく。年少児は年長の誰がどのような技術をもっているのか知り尽くしていた。年少児も年少の終わり頃にはいくつかの技を身につけてきていた。

自分の世界で創っていく遊び文化 → 情熱・迫力・真剣さ

- 文化の中に誘い込まれていく時、年長児の真剣な目であったり張り詰めた空気だったりなど、「生」「命」「生命」を感じられるものに感動するのではないか。それは、技術の感動とは違う別の感動だと思う。

年長になって

こまの回し方などの技術がどんどん磨かれていく。幼児たちが独自に生み出した技の数々。真剣な友達とのやり取り、気づきを伝え合う姿がそこにある。

水の中で回るだろうか

…タライに水を張りその中に投げ入れている。



レールの上は回るだろうか

…なんとか狭いレールに乗せようと紐で操る



高いところ（1m）への投げ上げ回し、高いところからの投げ下ろし回しやフライパンや鍋の中で回しながらジャンプをさせ、その回数を競う。箱の中で回し、蓋を閉め音で回り具合を競う。網の上で回すなど、幼児の発想は自由で豊かだ。こま回しのほとんどが4・5人の幼児で遊びを展開させていた。少人数の中で一つの遊びにこだわり、さまざまな力を深めていった。

また他の場所でも少人数の遊びが展開され、合体して多人数となり刺激を受け、また少人数へと移っていく様子が見られた。



● 幼児たちが少なくとも幼稚園で1年以上の歳月をかけ、こまの様々な技を伝え合い身につけていく姿から、遊び文化の創造には「無限の時間」が必要だといえるのではないか。それは単に長い時間のことをいうのではなく、ゆったりとのびのびと一つの遊びに没頭し、試したり創造したり、工夫したりする気持ちが生まれてくるような質的な時間のことであり、そのような無限の時間を幼児期に体験させられることが重要であると思う。その中で、幼児は自分たちなりの遊び文化を創っていくのではないか。

○ 「こまはあきらめた」・・・多くの技の競い合いの中、友達の様子をずっと見ている幼児がいる。

「できないの」といいながら、友達の迫力に引き込まれている。頭の中では自分は回せないという不安とこまを回している自分のシミュレーションでいっぱいになっているであろうと思われた。

● 無限の時間を大事にし、不安の枠を少しずつ払いのけながら体験する喜びへと導いていき、自分なりの遊び文化を創る楽しさへ気持ちを育てていくことが重要である。「弱い気持ちになったけど、決してあきらめなかった自分」に気づかせていきたいと思った。

一つの遊びに夢中になる体験
没頭する体験

生きる喜び
友達の存在を感じる
自分の存在を感じる

他者を感じる

誰かに知らせたい

共感
響感

共に創る

考 察

遊びが深まり発展する道筋を体験することは、心と体が動き出し、多くの創造が生まれ「遊び文化」が作られるといえないだろうか。自分なりの新たな力を誰かに知らせたり、他の人とかかわっていき、そこでまた人や物とかかわり、幼児ならではの世界を創造していく。ひとつの遊び文化を自分なりのペースで深めていく過程に、心と体の連動が始まるのだと思う。

教師が、ひとつの遊び文化を他の幼児の心にも響かせたい、振り動かしたいと考えるなら、遊び自体ではなくその遊びにある幼児の情熱と迫力と生命感などを実感できる遊びを支えていき、他の幼児がそれを感じ取れるような環境を作っていくことが必要ではないか。

<話合いから>

- 年長への憧れの気持ちから広がり深まった遊びを、年長になった今、更に年少へかかわり深めていく援助が遊び文化を伝え広げていくことになる。
- 諦めずに取り組むことができたのは、友達の存在であり、情熱や迫力、真剣な友達の姿に心がかきたてられたからだろう。
- ただ「楽しかった」に留まらず、「どうしてなんだろう」「不思議だ」と思う気持ちや気付きを引き出す援助が大切だ。
- 「できない」といった幼児のように、無や不確定のことであっても幼児の心に「何もない」ということではなく、アンテナを立てて情報をキャッチしようとしている状態であるとおさえた。教師が幼児の思いにスポットを当て援助を心がけていくことは、幼児が無から有に、不確定から確定という過程を経験することになる。ここにも心と体の連動がある。



ポイント

4歳の時にこま回しのモデルになる高齢者の方や5歳児の姿に注目し、憧れながらまねて遊び始め、少しづつ技術を習得して「こま回しの文化」を知ることができました。そして、5歳児になるといろいろな回し方に挑戦するようになり、回しやすい場所で回すだけでなく、「水中でも回せるか」「どんなふうに回るか」「他の回し方はできるか」「レールの上はできるか」など挑戦しながら、いろいろな発見をし、考えをめぐらせていくことが分かります。「こまを回す」という文化を知り、回るという動きに興味をもつ、回せるように技術を習得する、いろいろな遊び方に挑戦する、そして、それぞれの経験で自分なりに「こまの回り方」に注目して発見や試行を重ねる、という中で、「科学する心」が育まれていることがあります。